

# い か こ 伊 加 古

えみし せいり  
蝦夷の英雄と不透明な征夷戦



## 伊加古とは何者だろう？

みなさんは蝦夷の英雄 伊加古を御存知ですか？  
朝廷軍に果敢に抵抗した蝦夷の英雄として、胆沢のアテルイとモレが有名ですが、ここ二戸地域仁左平にも伊加古という英雄がいました。

地元の人たちは、二戸市内から仁左平に向かう市道を「伊加古ロード」と名付けて、郷土の英雄伊加古を顕彰しています。

二戸市立仁左平小学校PTAでは、子どもたちの郷土愛を育むため、約8か月かけて「仁左平の英雄伊加古」という紙芝居を製作し、平成27年3月にお披露目会を開催しました。

その紙芝居によると・・・ 学校帰りの一平君と桜ちゃん。ゲーム機の中から突如、長身・イケメンの大男が出現。その男こそ郷土の英雄伊加古。突風とともに千年前の平和な世界に迷い込みます。そこに、この地の豊富な資源を奪わんと平和な村に攻め込んできた2万6千の朝廷軍。迎え撃つは5千の伊加古軍。地の利を生かしさんざん朝廷軍を打ち破ります。ところが朝廷軍は卑劣にも人々の家に火を放つという暴挙に。民の生活を守るため、伊加古は朝廷軍に投降。縛られて引き立てられる伊加古。その後伊加古の姿を見たものはいない・・・



仁左平小学校PTA制作の紙芝居「仁左平の英雄伊加古」

## 伊加古の実像はどうだったんだろう？

実際の伊加古とはどんな人物だったのでしょうか？  
伊加古が記された史料は平安初期に朝廷で編さんした「日本後紀」だけです。

それによると、アテルイが坂上田村麻呂に降伏した約10年後の弘仁2年(811年)2月、文室綿麻呂らから「奥羽両国の兵26,000人で爾薩体(岩手県北部から青森県南部の呼称)と幣伊(岩手県東部山岳、海岸地帯)の2村を征したい」との奏上がありました。

3月には、出羽守大伴今人が同地の俘囚(朝廷に服した蝦夷)300人を動員して爾薩体の敗残勢力60人を殺戮。4月には征夷将軍に文室綿麻呂を、副将軍に大伴今人を任命し征夷戦を進めることになりました。

その年の7月、邑良志間村(現在の浄法寺付近?)の都留岐という土豪が朝廷に対し「自分たちは爾薩体村の伊加古らと久しく敵対関係にある。今、伊加古らは都母村(青森県上北地方)にいて、自分たちを伐とうとしているので先手を打って襲撃したい」と申し出ます。

朝廷の征夷戦という「侵略者である朝廷軍対抵抗者である蝦夷」という単純な図式で考えてしまいます。しかし、実際には蝦夷内部にも朝



明治18年の国道改修の際、おびただしい人骨が発見されたため、それを征夷戦の蝦夷の犠牲者として祭るアイヌ壇

廷と結びつこうとする勢力もあれば、徹底抗戦しようとする勢力もあり、決して一枚岩ではなかったようです。朝廷側は、その敵対関係を利用して、「夷を以て夷を伐つ」のたとえどおり、現地の同盟者勢力を利用して征夷戦を進めていきました。

## 朝廷軍は本当に勝ったんだろうか？

2万ともいわれている朝廷軍ですが、実際には現地の帰順勢力を使っただけの征夷戦だったようです。

文室綿麻呂の征夷戦ですが、実際には戦果の方はパッとしません。9月22日には、輜重兵(兵糧等を補給する兵)が足りないのを追加してほしいと天皇に泣き付けています。

ところが、それからわずか約10日後の10月5日には、突如征夷軍から「斬殺した賊や捕虜の数はやや多く、投降者も少なくない」と戦果の報告がなされます。それを受けて、同年12月13日には朝廷から、「長年人民を苦しめていた蝦夷を征夷将軍文室綿麻呂を遣わして平らげた、逃れるものは一人もいない」と一方的な「勝利宣言」と将軍顕彰が行われます。



つい10日前には泣き言を言っていた征夷軍からの勝利の報告、そしてあまりに唐突な朝廷の勝利宣言、何とも不可解です。

蝦夷との戦いは三十八年戦争と言われるほど長期化しており、お互いに疲弊の極にありました。朝廷側としても、皆殺しにするといった戦術は採らず、現地勢力が反抗的態度を取らなければそれでよしと方針転換したと考えられています。そのため、大した戦果

がなかったにも関わらず、一旦ここで大げさな勝利宣言をして事態の終結を図ったとも考えられます。

東北古代史の泰斗 高橋富雄氏によれば、すでにこの地では、朝廷との和平・協調派が多数派であり、抗戦・独立派は少数派だった。伊加古に勝ったのは都留岐であり、和平派の主戦派に対する勝利だったとしています。

## 伊加古はその後どうなったんだろう？

伊加古がどうなったのでしょうか？ 捕らえられたとも逃げ延びたとも史書は何も伝えていません。

東北古代史の第一人者、新野直吉氏は、岩手県北・青森県地方にまで勢力を持っていた伊加古が一挙に討伐されてしまうなどということはとても考えられず、両者暗黙のうちに派手な敵対姿勢は見せない形になったのではないかとしています。

その後、蝦夷の末裔たちは、国府の在庁官人などとして律令国家の現地責任者となり、これが後の安倍氏や奥州藤原氏につながっていきます。

## 伊加古も見たのか「滝」と「藤」

ここ仁左平には知られざる名所があります。垂柳の滝と大萩野の藤の花です。

垂柳の滝は4段に流れ落ちる美しい滝で、脇には水神様の石の祠があり雨乞いが行われていました。

一方、廃校となった小学校(現大萩野公民館)の脇に広がる大萩野の藤。一戸町小鳥谷の藤島にも負けぬ見事な藤です。藤は日本固有種の花。伊加古もこのような藤の花を見ていたのかもしれない。



知られざる地名「大萩野の藤」

【参考文献】  
新野直吉「古代東北史の人々」,同「古代東北の兵乱」  
二戸市「二戸市史 第1巻」,「二戸市史 第3巻 人物二戸市」  
佐藤悦郎「第1回伊加古学習会資料」  
関 豊「爾薩平と伊加古」(「国説久慈・二戸・九戸の歴史」所収)

# くのへまさざね 九戸政実

秀吉に喧嘩を売った九戸城の主



「戦国ダンシ九戸政実」



九戸城本丸虎口跡

## 九戸政実は、なぜ九戸の乱を起したんだろう?

九戸政実(まさざね)は、戦国末期、北奥を支配していた南部家の一族として九戸城を本拠にその名を轟かせます。やがて、後継者問題で南部信直と対立し、当主となった信直に対する反乱、「九戸の乱」を起こします。そのことが豊臣秀吉の介入を招き、6万5千の討伐軍をわずか5千で迎え撃ちます。巧みな戦術で討伐軍を散々打ち破りますが、最後は偽りの和議により捕らえられ斬首されました。

この政実、南部家の有力武将でありながら、なぜ反旗を翻したのでしょうか?

よくいわれるのが、「南部家の後継者に弟の実親を据えようとして敗れたことを根に持って」という私怨説。本当にそうなのでしょうか?

当時の書状には、この地方が乱れている原因として「京儀を嫌いて」という言葉がしきりと出てきます。「京儀」つまり豊臣政権の政策に不満があったということです。不公平な取り潰し、農民に対する略奪、暴行。

「造反有理!」そう政実が叫んだかどうかは知りませんが、これまでの信直との対立関係から、反豊臣、そして秀吉の現地代理人である信直に対する反抗の指導者に政実が祭り上げられたものと思われます。

それにしても、なぜこのタイミングで蜂起したのでしょうか?秀吉の朝鮮出兵は、すでに翌年と決定されていたので1、2年待つべきではなかったか?情報がブロックされていたのか?黒幕がいたのか?本能寺の変に匹敵するほどの歴史のミステリーです。

## 本当は何歳だったんだろう?

政実は天正19年(1591年)に享年56歳で亡くなったと言われています。

九戸神社で保管している天文7年(1538年)の旧羽黒神社の棟札には、神社建立の「大旦那(施主)」として「政実」の名前があります。これは「政実」の名が記された唯一の史料です。

ところが、死亡時の年齢から逆算すると、神社建立の時の年齢が何と3歳!これは一体どういうことなのでしょう?元服前に「政実」という実名はあったのでしょうか?

残念ながら、新たな史料が発見されない限りこの謎は解けません。

仮に神社建立の時の年齢が元服

した15歳だったとすれば、九戸の乱の時の年齢は68歳位。享年62歳で亡くなった豊臣秀吉よりも長生きしたことになります。ただ、大分イメージが変わります。



棟札が保管されている九戸神社

## なぜ九戸村に政実の首塚があるんだろう?

九戸村にある「政実公の首塚」。政実ら有力武将は、上方軍本陣のある三ノ迫(現宮城県栗原市)で斬首されたはず。なぜ、九戸村に首塚があるのでしょうか?



政実公の首塚

言い伝えでは、斬首された政実の首を、乞食に姿を変えた家臣の佐藤外記が夜に紛れて持ち帰って、ここに葬ったとされています。一体、政実の首は本当はどこにあるのでしょうか?



ちなみに、有名な南部信直の肖像画。通常は上半身の絵しか載っていませんが、実は、手に政実の首を持っているんですよ…。展示の際には、今でも白い紙で覆っているそうです。

## 二戸にあるのになぜ九戸城というんだろう?

南部宗家の三戸城をはるかにしのぐ、北東北随一の規模を誇る九戸城。ここには、九戸城落城後に構築された東北最古と言われる石垣も残っています。

ところで、九戸城のある場所は二戸市、それなのになぜ九戸城と呼ばれているのでしょうか?

政実の頃は、地名などから「宮野城」とか「白鳥城」と呼ばれていたようです。落城後、近世風の城に改修され、信直は「福岡城」と改称し、孫の重直が盛岡城(不來方城)に移るまで本拠としました。

南部氏が盛岡に移った後、地元では、信直が最後に居所を構えていた松ノ丸跡を「福岡城」と、それ以外の部分を「九戸城」と呼んでいたようです。これは、九戸氏に対する地元民の強い思いによるものと思われます。昭和10年(1935年)の国の史跡指定の際も「九戸城」として指定されています。

さて、九戸城落城後、城内に押し入った上方軍は、女子供を含めて皆殺しにしたと伝えられています。発掘調査の結果、二ノ丸付近から刀で斬られたような人骨が10数体発見されました。規模はともかく、やはり無で斬りはあったようです。

## もし政実が和議に応じていなかったらどうなったんだろう?

九戸城が落城した9月4日は新暦では10月中旬、冬も間近。もし政実が和議に応じていなかったらどうなっていたのでしょうか?

冬の到来とともに、兵糧不足や冬期間の装備などの理由で豊臣軍は引き揚げざるを得なかったと思われる。翌年は、すでに朝鮮出兵を決定していたため、北東北の一地方の城攻めどころではなかったはず。

さて、どうなっていたか?もしかしたら日本の歴史が大きく変わっていたかもしれませんね。

さて、ここ数年、地元では九戸政実で大いに盛り上がっています。

九戸政実の生涯を描いた高橋克彦氏原作の『天を衝く』を舞台化し、平成26年(2014年)、27年(2015年)の2か年にわたって市民文士劇で公演したほか、地域の若者による「九戸政実武将隊」も結成され各種イベントなどに「出陣」しています。



「天を衝く」の一場面



九戸政実武将隊

歴史の舞台となった九戸城には、4月から11月にはボランティアガイドが常駐してみなさんを御案内します。ぜひ九戸城で歴史のロマンを肌で感じてみてください。

なお、九戸政実についてもっと知りたい方は、九戸政実プロジェクト突撃隊作成の「九戸政実ガイドブック」を御覧ください。



「雄略不降」の風格漂う三ノ丸方面からの眺め

【参考文献】  
二戸市「二戸市史 上巻」  
九戸村「九戸村史」  
二戸市史編さん室「二戸歴史物語」  
七宮洋蔵「陸奥南部一族」  
百々幸雄他「骨が語る奥州戦国九戸落城」  
森ノブ「晴信と政実」「岩手の歴史と風土」(所収)

そう ま だい さく  
相馬 大作みちのく  
江戸市民を沸かせた陸奥の義士

## 相馬大作って何をした人なんだろう？

九戸政実が上方軍の姦計により非業の死を遂げた約240年後。もう一人の“マサザネ”が太平の世を騒がせました。九戸政実が天下人に逆らったとして処刑されたのに対し、こちらのマサザネは江戸市民の喝采を浴びました。

その男の名は、“下斗米秀之進将真”。一般には江戸出奔後の変名「相馬大作」で通っていますが、実名は奇しくも九戸政実と同じ“マサザネ”でした。当時の人は実名を名乗ることはめったになく、あまり知られていません。かの坂本龍馬も実名は直陰（のちに直柔）でした。

相馬大作は、寛政元年(1789年)、奇しくもフランス革命の勃発と同じ年に南部藩士の次男として二戸市福岡に生まれました。17歳のとき江戸に出て、北方警備の必要性を説く平山行蔵の門下に入り厳しい稽古を積みます。父の病気で一旦帰郷した大作は、文化14年(1817年)11月、蝦夷地(北海道)に渡り現地を探索します。また、金田一村に「兵聖閣」という道場を開き、門弟とともに蝦夷地でロシアと戦うことを想定した厳しい鍛錬を行います。

南部家の家臣だった大浦為信が豊臣秀吉から津軽の地の安堵を受けて以来、南部家と津軽家は犬

猿の仲でした。江戸城での席次は南部家が常に上席でしたが、文政3年(1820年)、藩主南部利敬が39歳の若さで死亡。跡継ぎの利用は幼少で無位無官。対する津軽寧親は幕府への工作が功を奏し従四位下侍従に昇進したため、ここに南部家と津軽家の席次の逆転が生まれました。

そのことに憤慨した相馬大作、参勤交代で江戸から帰る途中の津軽公を待ち伏せ、まず辞官を勧め、それが受け入れられないときは襲撃することを計画します。仲間と共に秋田藩白沢の岩抜山(物語では矢立峠。現在の秋田県大館市)で津軽公を待ち受けますが、同行した鍛冶の大吉の密告により、津軽公が難を避けて日本海側の道を通ったため計画は失敗します。藩に迷惑をかけることを恐れた大作は江戸に出奔。やがて幕府に捕らえられ、文政5年(1822年)獄門となります。享年34歳でした。

## なぜ大作は人気があったんだろう？

相馬大作事件が起こり、江戸市民はその“義挙”に対し拍手喝采を送り、赤穂浪士以来の武士道の鑑として賞賛しました。

津軽公が昇進のため、幕府上層部に対し贈賄工作を行っているらしいということはかなり知れ渡っていた

ようで、「さらし首生きて生首死んだよう」「生首が津軽の方を笑ってい」などといった、相馬大作を善、津軽公を悪とする落首が貼り出されたといわれています。

主君のために死をもって武士の一分を貫いたという行為が日本人の琴線に触れたようで、赤穂浪士同様、講談や浪曲でも何度も取り上げられたほか、戦前には何度も映画化されています。

ちなみに、かの吉田松陰も嘉永5年(1852年)の東北遊学の際、矢立峠を訪れ、大作を追慕する詩を作っています。

## 紙の大砲は本当に使えるんだろうか？

津軽公襲撃の際に使ったとされ、講談や映画でおなじみの紙の大砲。津軽公の駕籠を狙撃したが中は空っぽだった…というのが定番のストーリーです。

相馬大作の実用流では、ロシアとの戦いを想定して、携帯用の紙砲のほか、様々な銃砲があったとされていますが、実在が確認されているのは紙砲だけです。二戸歴史民俗資料館には相馬大作が紙と漆で作ったとされる千枚張りの紙砲が保管・展示されています。

紙で作った大砲なんて無理、と考えてしまいますが、和紙を何枚も貼り合わせた大砲は意外と丈夫なようです。真田幸村が大阪の陣で使用したという伝説もあります。どの程度の威力があったのか、実際に発砲実験ができないのが残念です。



現存する紙砲(二戸歴史民俗資料館所蔵)

紙ではありませんが、金属製以外の大砲の例としては、伊予の河野氏が松の木で作った大砲で毛利方の船を沈めたとか、スウェーデンのグスタフ・アドルフが革製の砲を作ったなど様々な話が伝わっています。

## 相馬大作の真意は何だったんだろう？

南部家の恥辱をすすぐため義挙したというのが当時の一般的な見方ですが、後世の見方はまちまちです。

青森県七戸町出身の経済史学者 盛田稔氏は「単なる南部家に対する忠義だてでなく、南部・津軽両家和解の上、協力して国防の急に当たるよう自覚を促すことにあった」としております。

一方、二戸市ゆかりの直木賞作家渡辺喜恵子氏は「かしこくもない殿様のために無駄に命を捨てた無意味な死、舌打ちしたくなるほどバカバカしい」と身も蓋もなく酷評しています。

もしも、大作が津軽公の襲撃に成功していたとすれば、一国の藩主が一介の浪士(藩士の子であっても無役であれば浪士)に殺害されるという前代未聞の重大事件。今度は、津軽藩士が逆に南部藩主を襲撃…など泥仕合にもなったかもしれません。そうすると、大作がかねて主張していた南部藩と津軽藩が手を携えての蝦夷地警備をするどころの話ではありません。

二戸市史編さん室の奥昭夫氏は、大作が門弟の前で津軽藩に対する批判・非難を一切口にしていないこと、大作の死後、門弟は肅々と北方警備の訓練に励んでいたことなどから、大作は密告により計画が露見することを計算して、一浪士による大名襲撃事件として演出したとしています。そのねらいは、津軽家の昇進に代表されるような、国防をそっちのけにした幕府の金権政治にたいする批判・抗議だったとしています。

みなさんはどのようにお考えになりますか？

片や南部宗家に反旗を翻した九戸政実、片や南部家の名誉を守るため一命をかけた相馬大作。相反する行動に見えますが、通じるものは死を恐れず権力に立ち向かう反骨精神なのかもしれません。



二戸市 龍岩寺にある相馬大作の墓

参考文献  
二戸市史編さん室「続・二戸歴史物語」  
二戸市「二戸市史 第3巻 人物二戸市」  
平成25年度二戸歴史民俗資料館講座「相馬大作の真の顔」  
二戸市教育委員会「二戸市の先人たち」  
相馬福太郎「相馬大作事件」(「因説久慈・二戸・九戸の歴史」所収)



演武場(兵聖閣)跡。かつては馬場、射的場、水練場、講堂などがあったという。